

全国・県学習状況調査における生徒の結果分析（3年）

今年度の分析

全体の概要	
国語	領域ごとに正答率を県平均と比べると、「話す・聞く」はほぼ同じ、「書く」はやや下回っている。「読む」と「言語事項」は県平均とほぼ同じである。A問題（知識）とB問題（活用）を比較すると、前者は県平均とほぼ同じ、後者はやや下回っており、課題があると言える。
分析結果・課題把握	
聞く	正答率は県平均とほぼ同じである。個の考えを小集団で吟味させ、全体に対して発信させる話し合い活動に慣れることが必要である。
書く	正答率は県平均をやや下回っている。A問題では県平均と同程度かやや上回っていたが、B問題では大きく下回る設問もあった。
読む	正答率はA問題B問題ともに県平均とほぼ同じである。
言語事項	正答率は県平均とほぼ同じである。漢字の読みは県平均をやや上回っているが、漢字の書きや語句に関わる知識はほぼ同じである。
改善に向けた具体的取り組み事項	
	話し合いの中で自分の考えを個や全体に表明する際に、反論や補足も意識しながら立論していくことや、話し合いの展開に応じて発言の工夫することに留意した学習場面をつくる。
	複数の資料を扱って、複数の設問（条件）を満たして記述する学習を仕組む。その中で、必要な情報を的確に取り入れ、条件に従って注意深く答えを構築していく力を育てる。
	さまざまな種類の文章をめあてに応じて丹念に読み取っていく学習を継続する。また、設問の意味や答え方を理解させ、あきらめや無解答を克服させる。
	毎日の漢字の課題や授業での漢字の小テストを継続して行い、語彙の習得を図っていく。文法や文学作品・作家等については、授業の中で適宜関連づけながら理解を定着させていく。

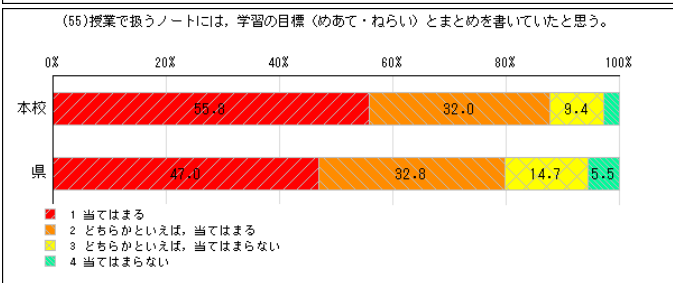
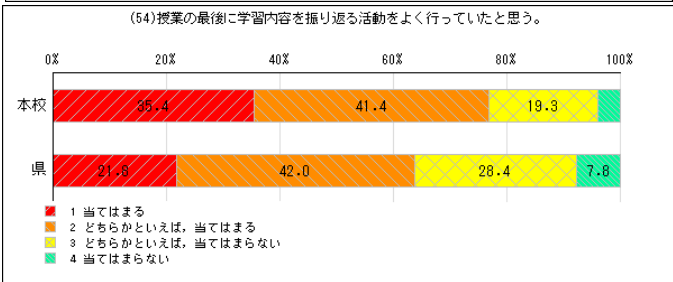
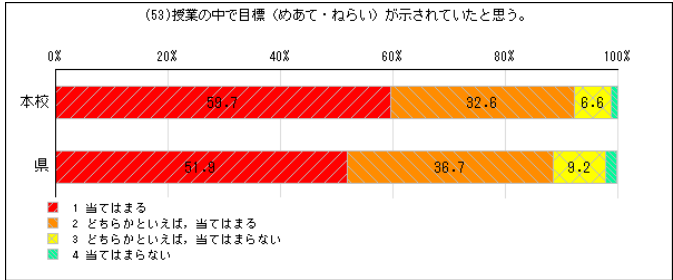
全体の概要	
数学	全体の正答率は県平均とほぼ同じである。しかし、到達度分布をみると「要努力」の生徒の割合が高くなっており、正答率の分布に二極化が見られる。領域別では「資料の活用」の領域で県平均を大きく下回っている。意識調査の中では「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒は29.8%にとどまり、県平均をかなり下回っている。知識や計算技能が身につけている生徒も、その知識を実生活の中でどのように活用できるか、利用すべきかまでは考えが及んでいない。
分析結果・課題把握	
知識・理解	県平均をやや下回っている。単純な用語や計算方法に対する知識はあるが、その知識の理解・活用ができていない状態である。「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」と答えた生徒の割合が低いことも要因のひとつに挙げられる。
技能	県平均とほぼ同じである。文字式の計算や角度を求める問題などの計算技能はおおむね身につけている。ただ、学習した内容と実生活に即した問題とが結びついておらず、活用ができていない。
考え方・考見方	県平均とほぼ同じである。考え方を説明する問題の無解答率が低くなっており、問題に取り組む姿勢に向上が見られる。
改善に向けた具体的取り組み事項	
	授業の中で、数学术語や数学的な表現を使って説明する場面を多くし、内容理解や定着を図る。
	意識調査では「数学で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」という生徒の割合が低い。身近な問題や実生活に則した問題などに取り組み、数学の有用性を実感させる。
	「数学の勉強は好きだ」「授業の内容はよくわかる」の質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒が県平均に比べて上回っており、授業に積極的に取り組む生徒が多い傾向にある。思考力を要する問題に対して苦手意識を持つ生徒も多いが、課題提示の仕方や学習形態を工夫していろいろな角度から問題解決ができる手立てを図りたい。

全国・県学習状況調査における生徒意識調査の結果分析（3年）

分析と改善に向けた具体的取り組み事項

ほとんどの教科で目標（めあて・ねらい）が示されており、授業の最後には、復習として目標にそった振り返り活動を行うことが定着してきている。

【 数値が特に高かった項目 】



分析と改善に向けた具体的取り組み事項

1日あたりのゲーム・スマートフォンの利用時間が全国に比べ多いために土日の家庭学習の時間が確保もできていない。与えられた課題（宿題）は予習として取り組むことはできているが、知識を定着させるための復習（家庭学習）を、自分で計画を立て取り組むことが苦手なようである。

【 数値が特に低かった項目 】

